

松 山 大 学 論 集
第 27 卷 第 4 - 3 号 抜 刷
2 0 1 5 年 10 月 発 行

エスノメソドロジーとフィールドワークの分岐点

—— ガーフィンケルの思想形成から ——

山 田 富 秋

エスノメソドロジーとフィールドワークの分岐点

—— ガーフィンケルの思想形成から ——

山 田 富 秋

はじめに

本稿は山田（2011a）において主張したように、「個性原理（haecceity）」の解明を目的としたエスノメソドロジーが、研究成果の空洞化を抱えることになるという批判を継承するとともに、個性原理が当該の社会現象の「教示（instruction）」として表現できるというガーフィンケルの主張に限定を加える。つまり、教示として表すことができるのは、「方法の固有性要請（unique adequacy）」の弱い使い方に限られるということである。そして、方法の固有性要請の強い使い方の場合には、エスノメソドロジストはフィールドワークを通して、研究対象となる社会のメンバーシップを獲得し、その結果、内部から当該社会を自明視できるコンピタンスを獲得しなければならない。1960年代から70年代にかけて行われた数々のエスノメソドロジー的エスノグラフィーは、研究対象である社会において、メンバーとしてのコンピタンスの獲得を目指し、そこで獲得されたコンピタンスを批判的に検討することで生み出された果実として位置づけることができる。

つまり、これらのエスノグラフィーは、当該現象を再現する方法的教示だけに還元できない。むしろ、当該状況の成員でなければ理解することができない、内集団の主観的理解（シュッツ）を含んでいるのである。しかもその主観的理解はフィールドワーカーのフィールドでの位置づけと歴史的・時間的変化に対応して変化するものであるから、一回性という特徴を刻印された主観的理

解でもある。エマーソンたち (Emerson, et. al., 1995=1998) が明らかにしたように、エスノグラフィーがフィールドの内部から作り出されていく過程は、まさにこれと対応する。また、ガーフィンケルがハイデッガーの道具的存在性を参照して解明しようとする「生きられた現象」は、存在者と呼ばれる事物、すなわち「モノ」にしか当てはまらないのに対して、現存在 (Dasein) である人間の場合には、公共的で類型的な理解の水準をフィールドワークによって突破する必要がある。その意味でガーフィンケルは、存在者と現存在の位相の違いを無視しているのである。

現在の相互行為分析／会話分析がエスノグラフィーと袂を分かったのは、おそらく、ガーフィンケルがサックスの影響を受けて、メンバー概念を内団の成員から「自然言語の習熟」へと変更した時点ではないだろうか。それによって、端的な理解可能性である公共的な理解可能性が何よりも優先され、フィールドワークのプロセスにおいて、研究者が時に応じて調査結果を批判的に検討することも含む「解釈」を、一切排除するというポリシーが採用されることになったと考えられる。この変更によってさらに、メンバーの方法が特定の歴史的・状況的の定位を失い、繰り返し再現可能で、状況の内部から秩序現象を産出する教示 (インストラクション) へと変化したことも意味する。その結果、エスノメソドロジーと、フィールドワークの成果であるエスノグラフィーが、非常に近い関係にあるにもかかわらず、今日のように接点を失ってしまったのである。本稿は、失われた関係を再回復する試みである。

1. 「方法の固有性」要請の弱い使い方と強い使い方

ガーフィンケル (H. Garfinkel) のエスノメソドロジーの一貫した研究方針は、最晩年のリーバーマンとの共著論文 (Garfinkel & Liberman, 2007) でも謳われているように、最も外延を大きく取るなら、フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 (Husserl, E., 1936=1980) の主張に呼応するような、諸科学の成立に先立つ生活世界の解明ということになるだろう。しかし

社会学の一分野として、パーソンズから継承した秩序問題の解明という研究方針に狭く絞り込んでいけば、エスノメソドロロジーの研究対象は、ローカルな場面において自然に組織された日常的諸活動の「生きられた秩序性」である。ガーフィンケル自身の表現を使えば、それは「ローカルな場面において産出され、自然に説明可能な、生きられた秩序現象 (the locally produced, naturally accountable lived phenomenon of order*)」, Garfinkel & Wieder, 1992, p. 187] である。ガーフィンケルが例として挙げているものは、高速道路の車の波などの日常的諸活動である。

ハイデッガーの道具的存在性の議論のところでは後ほど詳しく触れるが、この日常的出来事は、常にある特定の出来事であると同時に「いま語られているワークの生きられた、その場の道具と結びついた進行過程(the lived equipmentally affiliated in vivo in-courseness of the work that is being spoken of) ibid. 1992] を指すという。そしてこれらの日常的諸活動の秩序性は「エスノメソドロジ的無関心」を発動させ「方法の固有性要請 (unique adequacy requirement)」を満たすことによって、「個性原理」の経験的記述として発見されるという。

ようやくここで個性原理という概念が出てきた。個性原理とは「メンバーのコンピタンス」を通して、その場でものごとが組織される、まさに独特の様式のことを意味する¹⁾。つまりエスノメソッドの字義通りの意味が伝えるように、メンバーは当該現象の内部から、熟練したメンバーの方法を使って、言い換えれば、メンバーのコンピタンスを通して、互いに見て取れるような(witnessably)やり方で、ものごとを観察可能で説明可能 (accountable) な独特の仕方で組織化しているのである。ここに生きられた秩序現象が出現する。そしてエスノメソドロジストは、「生きられた現象」が秩序だった現象として組織化されて観察される様態、つまり、その独特な様式を厳密に再現するようなやり方で経験的に記述しなければならないとされる。これが「方法の固有性要請 (unique adequacy requirement)」と呼ばれる研究方針である。

ガーフィンケルは方法の固有性要請には、弱い使い方と強い使い方があると

いう。弱い使い方とは、エスノメソドロジストが秩序現象を記述するために、研究対象となる秩序現象のローカルな産出と、その相互反映的で自然な説明可能性について、世俗的にコンピタント (*vulgarly competent*) でなければならないという要請である。(Garfinkel & Wieder, 1992, p. 182) これにロールズ (Garfinkel, 2002) の解説を加えれば、よりわかりやすくなる。ロールズによれば、日常生活者であれば自然に獲得している世俗的コンピタンスには、日常会話や歩行などさまざまあるという。例えば私たちは他人とぶつかるのを最小限にしながら、横断歩道を渡ることができる。つまり、私たちは横断歩道を渡るといふ秩序現象のローカルな産出と、その自然な説明可能性について世俗的にコンピタントであり、その意味でメンバーとしてのコンピタンスを獲得している。逆に言えば、エスノメソドロジストもまた当該秩序をその場で作り出し、自然に説明できる世俗的能力を獲得する必要があるということだ。そして、例えば横断歩道を渡るといふ世俗的コンピタンス (能力) において、エスノメソドロジストも他の人と一緒に、秩序現象を「認め、同定し、従い、教示し、記述することができ」(ibid. 1992) なければならないのである。ただしエスノメソドロジストも日常生活者である以上、彼／彼女もまた、こうした世俗的コンピタンスを自然に獲得していることは言うまでもない。

ところが、この要請の強い使い方について言えば、方法の固有性は自然に獲得されるどころか、むしろそれを獲得することは非常に困難を極める場合がある。ロールズの説明にしたがえば、例えば、科学や警察活動といった、専門分化した集団の日常的実践の方法の固有性を研究するエスノメソドロジストは、観察を通して得られた、さまざまな種類の資料や視聴覚データを収集するだけでなく、研究対象とした場所で何年間も過ごすことで、そこでの日常的実践にコンピタントな参加者になっている。彼女は、何年間も実験室で働いた後に数学士の学士号を取得した例や、プロのミュージシャンになった例、そして警察署でのフィールドワークの例を挙げる。(Garfinkel, 2002, pp. 6-7) このことを現象を再現する教示 (インストラクション) として読み換えれば、エスノ

メソドロジストの発見した方法の固有性は、そのまま当該の秩序現象を繰り返して産出するための教示（インストラクション）として使用可能であることになる。ガーフィンケルの言い方にならえば、方法の固有性は当該現象に特有なエスノメソドロロジーの研究成果そのものである。したがって、この秩序現象を観察可能にするために必要なコンピタンスは、エスノメソドロジストの「方法の固有性に適合的なコンピタンス（uniquely adequate competence）」（Garfinkel, 2002, p. 146）と呼ばれる。

方法の固有性要請の弱い使い方については、この社会の成員であれば誰でも自然に身につけているのに対して、強い使い方は当該状況のコンピタントなメンバーになることが要請される。次にロールズが最後に例として挙げていた、警察署でのフィールドワークを通して警察活動の方法の固有性を明らかにしたビットナー（Bittner, E., 1967）の研究を詳しく検討していこう。

2. ビットナーの警察研究

ビットナー（Bittner, E., 1967）は中西部の警察署を研究対象として選択し、そこで「スキッド・ロウ（Skid-Row）」と呼ばれる、いわゆる無法地帯における日常的警察活動を研究した。彼はスキッド・ロウで一年間におよぶフィールドワークを行い、同時に警官に対して100回のインタビューを実施した。

この研究の着眼点は行政警察と司法警察の違いにある。すなわち行政警察活動は、司法警察（law officer）活動のように、容疑者の逮捕等の法律に拘束される活動ではなく、主として個々の警官の裁量に基づく「治安の維持（peace officer）」活動である。彼が研究対象としたのは、行政警察活動の中でも治安維持活動であり、それは明確に定義することができない残余カテゴリーなのである。結論を先に言えば、ここに警官の日常的な裁量に基づく活動、つまり治安維持活動を産出するエスノメソッドが観察可能になると予想されたのである。

まず、警官へのインタビュー結果を要約して紹介すると、どの警官も、治安

を維持する仕事について、どんな活動が良い仕事なのかを明確に説明できなかった。そこでピットナーは、パトロールカーに同乗するなど、スキッド・ロウにおける日常的警察活動の参与観察を通して、逮捕に結びつかない「治安維持」活動を要請する状況と、その場でなされる熟練した実践的技術（practical skill）を明らかにした。それは以下のようにまとめられる。

まず、スキッド・ロウにおいて治安維持活動を要請する5つのタイプの場面として、以下が挙げられる。

- (1) 風俗営業業者（バーテンダー・ホテル職員等）の監督と交通取り締まり
ここで警察は風俗業者に定期的に訪問して、何らかのもてなしを受けることを慣行とする。
- (2) 軽度の法律違反の場面
ここでは逮捕に踏み切らず、二度と違反しないよう警告するだけである。これは結果として、特定の人物を常に見張っておくことになる。
- (3) 「警察を呼ぶ」公共的な要請場面
これは例えば酔っ払ってけんかが勃発するなど、状況の展開が周囲の者の手に負えなくなる場合である。こうしたトラブルが拡大する危険がある場合には、警官が仲裁に入る。
- (4) 群衆のコントロール
群衆が興奮して暴動を起こしかねない場合、暴動が起きないように防止する。
- (5) 責任能力がないと見なされる特定のカテゴリーの人々の監視
警察は、未成年、精神障害者、ホームレス、ゲッターの住人であるエスニックグループ、犯罪歴のある人々などのカテゴリーの人々を、いつでもトラブルを生み出す可能性を持つ人々と見なし、常に監視を怠らない。警察は、スキッド・ロウはこうしたカテゴリーの人々の住み処でもあると考えている。

警官はスキッド・ロウの各々の持ち場に配置され、常に日常的パトロールを行っている。そして、熟練したパトロール警官たちはスキッド・ロウの社会構造について驚くほど一致した同じ見解を持っていた。すなわち、スキッド・ロウは他の「普通」の地域とはまったく異なっており、そこは「普通」の生活を継続して送る能力も献身も欠いた人々の住み処である。そこで起こるすべての行為や人間関係を読み解く時の中心的なテーマは、もちろん場合によっては新奇の出来事によって変わることもあるが、たいていは彼らの無能力であり、彼らが普通になろうとすることを拒否しているということである。

警官の見解によれば、スキッド・ロウにおいては、過去と未来の連続性が断ち切られているため、ものごとが意味を持つのは、今のこの瞬間だけだとスキッド・ロウの住人は感じている。つまり、ある人の住所や職業、結婚の有無などが意味を持たないために、それらが今の瞬間を超えて持続的に結びつくことがないのである。したがって、通常は職業人や既婚者に期待される社会的責任を問うことができず、いわゆる無責任が「客観化された」形式となって確立するのである。

スキッド・ロウの住人の今の活動や所在、あるいは人間関係が、持続性や方向性を持たないということは、スキッド・ロウの生活を何らかの社会構造を背景として秩序立てて説明することができないということである。したがって、すべての瞬間は、偶発的な事故として認知され、一般社会のように、人々をカテゴリー化して認識する可視性が極度に低くなる。(Bittner, 1967, p. 706)そして一般社会がスキッド・ロウの住人をどう見るかと言えば、彼らは通常の役割関係を捨てた人たちと見なされるために、潜在的に不快な存在として、しかも、安全性を常に脅かすリスクとして見られるのである。パトロール警官もまた、この潜在的なリスクを常に意識している。つまり、この地域で発生する可能性のある危険や暴力に常に敏感になっている。スキッド・ロウにおいて治安の維持が困難なのは、ここの生活自体が、盗みや詐欺など、人々による人々同士の相互搾取がいつでも起こりうる場所として見なされているからだ。

それでは警官はどのような治安維持実践を日常的に行っているのだろうか。ビットナーは以下の3点にそれを要約している。

- (1) 熟練した警官は、この地域のすべての人々と知り合いになり、彼らやこの地域のさまざまな場所について非常に詳しい情報を得ようとする。それによって、部外者や一時的な「滞在者」を瞬時に判別できるようになるからである。
- (2) ある状況の秩序を回復するための介入の理由として、それが有罪であるかどうかの法的判断は他の理由と比較して特に重要視しない。
- (3) 強制権の発動は、状況の緊急性を鑑みて決定され、それが個々の人間に対して将来的にも及ぼす可能性のある影響については、ほとんど顧慮されない。つまり、スキッド・ロウでなされる警官の意志決定は、常にアドホック性を帯びる。

ルーティンなパトロール活動とは、この地域で働く人々と親しい関係を確立し、維持することである。警官がスキッド・ロウを管理できているかどうかは、どれだけこの人間を知っているかに比例することになる。個々の警官は自分の管轄について非常に詳細な知識を持っている。パトロール警官は自ら進んで人々の生活の中心に入っていく、彼らの意識に自分たちが常にとどまるようにする。例えば、巡回中にホテルに入って、ホテルの各部屋を見て回り、従業員にあいさつをする。そして、巡回中に会った人々に対して、ソーシャルワーカーほど親切ではないが、もし必要とあらば、衣食住や雇用について支援を行い、福祉や医療サービスを紹介する。

警官がパトロール中にトラブルに遭遇したとき、関係者の逮捕に踏み切るかどうかの法的意思決定は、その場の状況を判断する警官の自由裁量に従うことになる。例えば、愛称で呼ばれていた「ビッグ・ジム」と「ダコタ」は常連の飲み友だちだった。いつものことだが、ダコタが酔っぱらって、ビッグ・ジムの部屋に転がり込み、そうなるダコタは、ビッグ・ジムの持ち物を何でも盗む恐れがあった。ところが、酔いがさめて、もしも何かが盗まれたとわかると、

ビッグ・ジムはそれを警察に届けるところか、怒りのあまり、ダコタを打ちのめしてしまうのが明らかだった。こうした状況判断によって、その晩、警官はビッグ・ジムを逮捕して留置場に入れる意思決定をしたのである。しかしいくら探しても、ビッグ・ジムは見つからなかったという。ここで留意すべきは、逮捕の意思決定が法的根拠にまったくもたづいていないことである。

こうした軽微な犯罪者を逮捕する際の警官の理由づけとしては、以下の2点が挙げられていた。すなわち、(1)ここの住人の多くは高齢で、弱く、あまり賢くないため、軽微な犯罪に対しても無防備である。(2)住人の多くが非合法的な活動に関わっており、性格も純良とは言えない。よって、犯罪に巻き込まれると、被害者として信用されないし、目撃者としても信用がおけない。この二つの理由を総合すると、軽微な犯罪であっても、それは重大なリスクにつながる恐れがあるから逮捕するという意思決定に結びつく。したがって警官は、状況の緊急性をアドホックに判断し、トラブルを発展させる恐れのある人物はその場から排除する等の意志決定がなされる。以上をまとめると、スキッド・ロウの治安維持活動とは、スキッド・ロウの詳細な情報をベースにして、当該状況にアドホックな警官の自由裁量を通して達成される熟練した技術であると言える。

3. ビットナーのエスノグラフィーと方法の固有性

ビットナーが明らかにしたことは、アメリカ中西部に位置する特定の警察署において、パトロール警官たちが日常的に「スキッド・ロウ」を管理する熟練した技術の詳細である。ここには逮捕に結びつく意思決定がどのようにしてなされるのか、その方法的手続きの詳細だけでなく、例えば、軽微な犯罪であっても逮捕せざるを得ないスキッド・ロウ社会の特徴がフィールドワークを通して明らかにされている。このようなスキッド・ロウ社会の特徴は、スキッド・ロウの住人とパトロール警官にとっては、なじみのものであるかもしれないが、一般市民にとっては潜在的にリスクのある場所、つまり「怖い場所」として漠然としか認識されていないだろう。その意味で、ビットナーがスキッド・

ロウ社会についてもたらした理解は、シュッツの言う内集団の主観的理解、つまり、スキッド・ロウの住人集団の成員に共通した相対的に自然な世界観 (Schutz, A., 1970=1980, 邦訳 40 頁) であると言えるだろう。

ところでガーフィンケルは、エスノメソドロジストの発見した方法の固有性が、そのまま当該の秩序現象を繰り返し産出するための教示 (インストラクション) として使用可能であると述べている。このことが意味することはどういうことだろうか。ガーフィンケルは別のところで、秩序現象の詳細は記述という形式で手に入るとは考えていないと言う。むしろそれは、サドナウが明らかにしたジャズピアノのアドリブ技法 (Sudnow, 1978=1993) のように、それを他者に教えることができる事柄に属する。つまりそこで発見されたことが真実なのかどうかということに、エスノメソドロジストの発見は拘束されないであり、むしろ、それが互いに見て取るようなかたちで提示できるかどうかにか拘束されているのである。つまり、発見されたことが、実際にやってみて適切な結果が出る方法であることが重要である。これを「教示された行為の実践的妥当性 (praxeological validity of instructed action)」と呼ぶ。(Garfinkel, 2002, p. 185)

この点はサドナウのジャズピアノの訓練という方法の固有性の強い使い方の例よりも、横断歩道を人によつからないように渡るといった弱い使い方の例の方がわかりやすい。つまり、私たちが横断歩道を渡る時、道の反対側から歩いてくる人たちを見て、彼らの歩く速度や進路に応じて、こちらの歩く速度や進路を絶え間なく調整し、その中にゆっくりしか歩けない高齢者や幼児などを発見すると、そこで立ち止まったり、信号機の点灯時間を気にしたりする。そして、私たちがこうしたメンバーの方法を実践している行為は、私たちの振る舞いを見ている他者もまた見ているのである。こうして見ていることを見ているという二重性の中で、方法の固有性の実践的妥当性が検証される。したがって、例えば、横断歩道を歩きながらスマートフォンを凝視する行為は、向こうから歩いてきた人と衝突するおそれがあり、実践的妥当性を持たないことがわかる。

ガーフィンケルが「生きられた秩序性」の例として挙げた「高速道路の車の波」という現象についても同じことが言える。つまり、高速道路を走っているドライバーは周りの車両との関係において、速い車、おそい車、ふつうの車という区別にもとづいて、自分の車の走り方を制御している。ふつうの速度で走っている車のかたまりを見ると、速い車は隙をみつけて、そのかたまりを追い越す。その結果、一定の車のかたまりが、走るスピードの違いごとに発生するという、車の波が産出されるのである。こうした車のかたまりは、偶然ではなく、ドライバーたちが、お互いに車の動きを見て、互いの判断を伝えあい、運転を協調させた結果、作り出されたものである。横断歩道を渡る時のように、ドライバーたちは互いに互いが「見ているということを見ている」。その結果、急に減速した車を相互によけたり、無理な追い越しをかけた車に互いに気を配る。(前田他編, 2007, 第3章)

この二つの方法の固有性の弱い使い方の例を見ると、どちらの方法も互いに見て取れるかたちで²⁾ 実践的な妥当性を満たすことがわかる。その意味で、サドナウのジャズピアノの技法も、それが演奏法であるというかぎりでも、たとえ強い使い方にあてはまるとしても、実践的な妥当性を満たす好例であろう。この文脈にビットナーのエスノグラフィーをあてはめて考えると、彼の発見はスキッド・ロウを管轄する警官のパトロール秩序を産出する教示になるのだろうか。そう言える部分も確かにあるが、スキッド・ロウ社会に関する内集団の主観的理解の提示は、方法というより主観的理解の内容といった方が適切である。つまり、ビットナーの研究成果には方法だけに還元することができない内容的知識が存在するのである。

4. ハイデッガーの道具的存在性と方法の固有性

ここでガーフィンケルが日常的諸活動とは「いま語られているワークの生きられた、その場の道具と結びついた進行過程 (the lived equipmentally affiliated in vivo in-courseness of the work that is being spoken of) Garfinkel & Wieder, *ibid.*

1992]であると述べた部分を、ハイデッガーの道具的存在性 (Zuhandenheit) 概念と結びつけて再検討しよう。それによって、ガーフィンケルが方法の固有性という概念で考えていたことが、さらに明らかになる。ここで「道具と結びついた進行過程 (equipmentally affiliated)」とは、山田 (2011b) で論証したように、ハイデッガーの道具的存在性 (Zuhandenheit) を意味する。そしてガーフィンケルと同様に、ハイデッガーも道具が使われている時は透明性を獲得し、使用者には端的に見えないと指摘する。ガーフィンケルはこの透明性を一端停止させることによって、日常的諸活動の方法の固有性を明らかにすることができる。それが、「ハイデッガー的トラブルメーカー (Heideggerian troublemaker, Garfinkel, 2002, p. 211)」である。このトラブルメーカーを利用して「道具と結びついた」仕事場に特有の協働的ワークを解明できるようになる。

ガーフィンケルは例として、障害や病気の外に、視野を上下左右逆転させる逆転メガネなどの「トラブルメーカー」を挙げ、逆転メガネと先天性夜盲症などの例を詳細に検討している (Garfinkel, 2002, pp. 125-6. & Ch. 6) トラブルメーカーによって、日常的な道具使用の透明性 (transparency) が克服され、ローカルなワークの社会的組織化の細部が明るみに出される。この考え方をハイデッガーに遡って検討することにしよう。詳しい議論は山田 (2011b) に譲って、「技能の現象学」としてハイデッガー哲学を位置づけたドレイファス (Dreyfus, H. L., 1991=2000) の議論を要約して示す。

ドレイファスによれば、私たちが道具を使用する時、道具は端的に消える。例えば盲人が使う白杖は、白杖として使用していない時、その表面が滑らかである等々の特徴を意識的に言うことができる。ところが実際に、それを使用すると、そのとたんに、白杖の存在は消え、白杖の使用者には白杖を使って何らかの行為をすることが中心になる。これが道具使用の透明性 (transparency) である。(Dreyfus, H. L., 1991=2000, pp. 64-69.) ここで重要なことは、道具を使うという配慮的交渉において、道具は主題的に把握されるわけではなく、むしろ「透明性」を獲得していることである。したがって、ガーフィンケルが構

築的（形式的）社会分析を徹底的に批判するように、もし道具使用を思弁的・構築的に考えたとしたら（これがハイデッガーの言う事物的存在性の捉え方にあたる）、道具的存在性自体を理解することはできなくなる。つまり、道具的存在性の理解は、ガーフィンケルの言う方法の固有性の理解と同じである。

門脇によるハイデッガーの『存在と時間』の初期の目論見は、まさにガーフィンケルと、それに続く相互行為分析／会話分析の主張と符合する。門脇（2008, 51頁）によれば『存在と時間』の当初の企図は、現存在が事物的存在性の概念によっては決して捉えられないことを立証することだったと言う。つまり、実証主義的世界認識がモデルとする、世界を客観的実体として認識する存在様式は、実は日常的な世界内存在の例外状態であり、世界内存在の働きが停止してしまっただけの状態なのである。われわれの日常の多くが、道具的存在性という配慮的気遣いの状態で営まれているにもかかわらず、従来の哲学や科学は、この故障状態を理論装置に置き換えて理解しようとしてきたという。この点はまさに、ガーフィンケルが構築的・形式的社会分析が「実際の諸活動」を解釈定理を使って分析結果に変換することで、実際の諸活動自体を廃棄してきたと主張するのと同じである。

ハイデッガーの初期の目論見をドレイファス的に言い換えれば、私たちの日常生活を占める習慣的な行為や道具使用は、意識された心的表象を伴わない没入的な志向性であり、『存在と時間』は配視という没入的な志向性の持つ技能的な「いかにすかしの知（know-how）」を扱う技能の現象学として位置づけられるのである。（門脇, 2010, 223-4頁）さらにドレイファスは、社会学における技能の現象学の応用として、エスノメソドロジーを位置づける。

そしてガーフィンケルと相互行為分析が取った方向性と同一ように、ドレイファスは、道具的存在性を背後で支えるものこそ、ウィトゲンシュタインの言う「慣習の振る舞い（practice）」であり、ハイデッガーの「存在了解」の別名にほかならないと主張する。つまり、あらゆることからの理解可能性を、ふるまいの一致、あるいは生活形式の一致に求めて、それ以上の哲学的基礎づけ

を拒む。(門脇, 2010, 224頁)そして「考えるな, 見よ!」の標語が教えるように, 思弁的な解釈を退け, 進行中のワークにおいて達成される「端的な理解可能性」だけを存在了解とみなすのである。

ところがすでに指摘したように「ハイデッガーは当初, 現存在の前理論的な日常的な存在了解を, そこで現存在の存在論的構造を取り出すことができる, 中立的で無差別的な理論的な基盤だと考えていた」(門脇, 2008, 106-7頁)という。つまり道具的存在性をそのまま論理的に敷衍すれば, 現存在(つまり人間)の存在論的構造を明らかにできると考えていた。ところが『存在と時間』を論述していく過程で「この日常性が同時に, 自らを世界のうちに喪失している現存在の非本来的な様態である」(門脇, 2008, 107頁)ことがわかってきたという。それは技能的な知として働く道具的存在者への配慮とは異なる, 他の現存在(人間)に対する気遣い, つまり共同存在における他者把握のことである。ここでガーフィンケルとハイデッガーとの分岐点が見れる。

ほとんどガーフィンケルの主張と重なるドレイファスも後に自分のハイデッガー解釈の誤りを認めたが(山田, 2011b), ハイデッガーが描く日常的な他者把握は, 平均化され匿名化された世人(das Man)の支配の状態であり, そこで現存在は「平均性, 均等性, 存在免責, 迎合」といった類型化された「世人というありさまで存在している」(H. s. 129)³⁾のである。つまり, 私たちが日常生活において他の現存在と出会う形式は, 自らを世界のうちに喪失している現存在の非本来的な様態である。そして, この非本来的な様態を脱するためには「蔽塞や不明化の一掃」と「歪曲の打破」が必要とされる。つまり「現存在が世界を自分の眼で発見し熟察したり, また現存在が自己の本来的存在をおのれ自身に開示しようとするときには, このような「世界」の発見と現存在の開示は, 現存在が自分を自分自身から閉め切るために用いてきたさまざまな蔽塞や不明化の一掃として, さまざまな歪曲の打破という形でおこなわれるのが常である」(H. s. 129, 細谷訳)。

社会学的研究の文脈において, 世人による支配の状態を考えれば, それは社

会学者が調査を開始した当初に立ちはだかる、匿名的で平均化された類型的理解のことになるだろう。世人による「蔽塞や不明化の一掃」を成し遂げた例として、Good, D (1994) の重度障害児研究が挙げられる (山田, 2011b)。グッドは世人による支配から脱するために、健常者としての常識や身体感覚を相対化する自己点検を徹底的に実践したのである。さらにこの文脈において、ピットナーのフィールドワークを位置づけ直せば、彼はパトロール警官とスキッド・ロウの住人の視点から内集団の主観的解釈を再構成することによって、一般の人々の類型的理解を打破したとも言うことができる。

ここでまとめよう。道具と結びついた進行中のワークの中に「個性原理」を経験的に研究することは、道具的存在性の透明性を一時的に停止させ、そこから「端的な理解可能性」としての方法の固有性を明らかにする研究として成立することがわかった。ところが、ハイデッガーの考え方自体が転換したように、それは道具的存在性の水準においてのみ妥当するだけで、現存在（人間）の存在了解の水準においては、それをそのまま適用することはできないのである。むしろそれは現存在の本来性の了解を阻止する「世人」の支配を許してしまう。それではガーフィンケルには「世人の支配」を打ち破る方法はまったく存在しないのだろうか。私はそう考えない。なぜなら、ピットナーもグッドも「方法の固有性」要請の強い使い方を通して、現存在の存在了解にある程度到達していると考えられるからだ。しかしながら、個性原理の探求を秩序現象の教示（インストラクション）とのみ捉えようとすれば、フィールドワークから得られた、内集団の主観的解釈に関する内容的知識を取り逃してしまうだろう。それでは、メンバーの方法から主観的解釈を排除するという決断が、ガーフィンケルの思想形成の中で、どのようになされたのかを、最後に推測しよう。

5. 方法から内容へ

ガーフィンケルがメンバーという概念を集合体のメンバーという意味から「自然言語の習熟」へと変更したのは、どういう理由からだろうか。例えば、

Garfinkel (1967) においては、記号と指示対象が対応しているという実証主義の前提を批判する時においても、まだ成員（メンバー）が、当該社会の内部から社会を把握する人間という意味で使われている。

（前略）共通理解が可能となるのは、社会構造について範囲が厳密に規定されている知識を共有しているからではなく、もっぱら日常生活についての背後期待にそって行為することが、道徳的なこととして強制されているからに他ならない。社会の成員にとり、社会生活上の諸事実についての常識的知識は、現実の世界についての制度化された知識なのである。（中略）この場合、成員が自ら進んで従う背後素地とは、その社会の「内部から」見えるがままの社会生活に関する信念の正統な秩序のことである。成員の視点に立った場合、成員が背後素地にあえて従おうとすることは、「社会における歴然たる当たり前の事実」を把握しそれに承服することに他ならない。（Garfinkel, 1967, Ch. 2=1989）

すなわち、社会の成員にとって常識的知識は、現実の世界についての制度化された規範的な知識であり、彼らはそれに承服し、従うのである。この文脈では明らかに、成員を「自然言語の習熟」と読み換えることはできない。

しかしながら、中村和生 (2015) によれば、ここに大きな変化があるという。というのも、このパラグラフで重要な点は「共通理解が可能となるのは、社会構造について範囲が厳密に規定されている知識を共有しているからではなく、もっぱら日常生活についての背後期待にそって行為することが、道徳的なこととして強制されているからに他ならない」という点である。つまりガーフィンケルによれば、私たちが記号と指示対象の一致と想定して行っていることは、当該の記号と指示対象とを実際に一致させるのではなく、むしろ社会的世界の「誠実な成員」として、記号と指示対象の適切な一致を、社会の成員であれば誰にでも説得的なかたちで表示することなのである。

そしてこのことを例証するための有名な「会話明確化」実験は、その内容が時系列的に変化しているという。最初は、共通理解が可能であるのは、実質的な知識の共有によると主張される。つまり、知識を共有した内集団にしか会話内容を理解できないことをガーフィンケルは認めていたという。ところが、それが、会話をそばで傍聴していた者であれば誰にでもわかる水準の理解へ変化していったという。これは自然言語の習熟という概念まで、あと一歩の変化である。

会話明確化実験とは「用紙の左側に、当事者たちの実際の発話を、いっぽう右側に、当事者とその相手が語っていたと両者が理解している内容を書かせる」(Garfinkel, 1967, p. 38=1989, p. 37) というものである。この会話は「ある学生自らと妻の間でなされた次のような対話」(ibid.) であり、会話者本人それぞれが、この対話について理解した内容を書いたとされる。

そして中村が指摘するように、ガーフィンケルは「行為の過程と所産はいずれも、両当事者による－それぞれ自分のため同様、相手のために行われる－こうした会話展開の内部からしか知ることができない」(ibid. p. 40=1989, p. 40) と言明している。これを中村は「強い意味での当事者主義」と呼び、「結局は、会話の本当の意味なるものは発話者本人にしかわからない」ことを問題にしている。つまりこれを書いたガーフィンケルには「第1に、これでは会話という相互行為は発話者本人以外には分析不可能になり、あらゆる観察者による分析が締め出されることになる。(中略) 第2に、こうした例証は、意味内容の確定作業こそが理解であるとした点で、つねに解釈作業が伴う過程として会話の理解を提示してしまってもいる」という2つの問題があると批判する。

ところが同じガーフィンケルは、その後の2つの論文、つまり Garfinkel (1967, 第1章) と、サクスの共著である Garfinkel & Sacks (1970) において、同じ実験を使っているにもかかわらず、この「当事者主義」を廃棄していくという。最初の変更点は課題設定の変更である。Garfinkel & Sacks (1970) では「学生は、日常会話の当事者の話を盗み聞いて、当事者が言ったことを書き、つぎに

その当事者が実際に語った内容をそのわきを書くよう求められた」(Garfinkel & Sacks, 1970, p. 354, 中村和生訳)。つまり、会話内容の理解を書くのは当事者ではなく、傍聴者になった。もうひとつの変更は有名なものである。それは学生が内容を書いたレポートを提出するたびに、ガーフィンケルは、説明があいまいなので、もっと精密に書けと何度も要求したという。しかしそう要求された学生たちは、これ以上精密に書き直すことは原理的に困難であると主張し、もう一度書き直す代わりに、二人の対話者が「実際に」話していたことと、「おそらくは」話していたことを区別して、彼らの話し方、つまり、彼らが対話する時に従っていた教示(インストラクション)あるいは、規則(ルール)を示そうとしたのである。しかし、ガーフィンケルが言うように、すべての規則は原理的に不完全であるため、学生たちは規則を完全に書き出すという不可能な課題に取り組んでいたのである。(Garfinkel, 1967, pp. 29-30) これによって、話された内容が話す方法へと変更された。

中村和生(2015)はこの変更を、現在の相互行為分析/会話分析⁴⁾を導く大きな前進と捉えているが、私はそうは考えない。むしろすでに指摘したように、生きられた秩序現象を方法的知識にだけ還元し、それと一体化している内容的知識、あるいは、この「会話明確化」実験の当初に表明された当事者主義は、フィールドワークにとって逆に必要なものである。ビットナーが中西部のパトロール警官の日常活動を通してスキッド・ロウの管理に関わるコンピタンスを習得したように、この場合も、当該夫婦の営む家族文化に精通するためのフィールドワークを行うことも考えられよう。つまり、ガーフィンケルが秩序現象から方法と内容を分離したために、ハイデッガーのいう道具的存在性の水準における方法の固有性だけが研究対象とされてしまったのである。これは1960年代以降、エスノメソドロジーに触発されてなされた数々のフィールドワークの価値を低い評価にとどめることになった。これからはむしろ、制度的場面の会話分析⁵⁾が主張するように、エスノグラフィックな背景的知識を運用しながら、会話分析を行うことも可能であり、そこから方法的知識に限定され

ない、現存在の存在了解へと道を開くことが可能になってくる。それはエスノメソドロジーとフィールドワークを、もう一度結びつけることになる。

謝 辞

本稿は本年（2015）3月に本学を退職した国崎敬一先生に対する記念として執筆した。今から振り返ると、私が京都精華大学から松山大学に移動する時、さまざまな手続きを厭わずに完遂されたのは、当時の人文学部長である国崎先生であった。ここに謝辞を述べたい。

注

- 1) 個性原理(haecceity)という概念について、Garfinkel(2002, p. 99)はつい最近まで、quiddityという言葉を使っていたと告白している。しかしquiddityが、同じ細部に注目する言葉であっても、ものごとの本質的な細部という意味を持つことがわかったので、使うのをやめたという。そしてhaecceityが意味するのは、これそのもの(just-thisness)である。
- 2) 原語は, witnessablyである。ロールズは、この用語を理解しない編集者について不平を言いながら、これこそエスノメソドロジーの核心であると主張している。(Garfinkel, 2002, p. 51.)
- 3) ハイデッガーからの引用の仕方は、多くのハイデッガー研究者に習って、Max Niemeyer Verlag (1927) 版のドイツ語の頁数を示した。Hはハイデッガーの略称で、sはドイツ語版頁数を示す。
- 4) 相互行為分析／会話分析については、『質的心理学ハンドブック』に収録された山田(2013)を参照せよ。この論文でも、方法的知識と内容的知識の関係性について問題にしている。相互行為分析の目的は、道具的透明性を獲得した方法的知識を、実際の会話のシーケンスの展開に沿って、論理文法として解明することである。しかしそれは誰にでもあてはまる「世人」的「端的な理解可能性」にとどまることを問題として指摘した。
- 5) 病院、学校、法廷といった制度的文脈において、会話分析がエスノグラフィーと組み合わせられて使われることで、方法的知識と内容的知識の架橋が可能になると考える。これについては、古典的なDrew, P. & J.Heritage, 1993を参照せよ。

引 用 文 献

- Bittner, E., 1967, The Police on Skid-Row: a Study of Peace-Keeping, *American Sociological Review*, Vol. 32, No. 5.
- Dreyfus, H. L., 1991, *Being-in-the-World*, MIT Press., 2000, 門脇俊介・貴成人・轟孝夫・榎原

哲也・森一郎訳『世界内存在』産業図書

- Drew, P. & J. Heritage, 1993, *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge University Press
- Emerson, R. M., Fretz, R. I. and Shaw, L. L., 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, University of Chicago Press., 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳, 1998, 『方法としてのフィールドノートー現地取材から物語作成まで』新曜社
- Garfinkel, 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall
- Garfinkel, H. ‘Studies of the routine grounds of everyday activities’ Chapter 2 in *Studies in Ethnomethodology*, 1967 = 北澤裕・西阪仰訳, 1989, 「日常活動の基盤」『日常性の解剖学』マルジュ社, 57頁
- Garfinkel, 2002, *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*, Rowman & Littlefield
- Garfinkel & Sacks, 1970, On formal structures of practical actions, in J. C. McKinney and E. A. Tiryakian (eds.), *The Social Process of Scientific Investigation*, Reidel, pp. 269-284.
- Garfinkel, H., and D. L. Wieder, 1992, “Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis” in Watson, G., and Seiler, R. M. (eds.) *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology*, Sage, pp. 175-206.
- Garfinkel, H & Liberman, K., 2007, Introduction: The Lebenswelt origins of the sciences, *Human Studies*, vol. 30. pp. 3-7.
- Goode, D., 1994, *A World Without Words*, Temple University Press.
- Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag. 細谷貞雄訳, 1963, 『存在と時間』理想社
- Husserl, E., 1936, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Springer, 細谷恒夫・木田元訳, 1980 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社
- 門脇俊介, 2008, 『『存在と時間』の哲学』産業図書
- 門脇俊介, 2010, 『破壊と構築ーハイデガー哲学の二つの位相』東京大学出版会
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編, 2007, 『ワードマップ エスノメソドロロジー』新曜社
- 中村和生, 2015, 「分析的エスノメソドロロジーとポスト分析的エスノメソドロロジー」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』144: 17-54
- Schutz, A., H. R. Wagner (ed.), 1970, *On Phenomenology and Social Relations*, The University of Chicago Press. 森川真規雄・浜日出夫訳, 1980, 『現象学的社会学』紀伊國屋書店
- Sudnow, D., 1978, *Ways of the Hand; the Organization of Improvised Conduct*, Harvard University Press, 徳丸吉彦・村田幸一・ト田隆嗣訳, 1993, 『鍵盤を駆ける手 社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』新曜社
- 山田富秋, 2011a, 『フィールドワークのアポリア』せりか書房

山田富秋, 2011b, 「ガーフィンケルとハイデッガー—ドレイファスの解釈をてがかりとして—」『松山大学論集』第23巻5号, 95-121頁

山田富秋, 2013, 「相互行為分析と談話分析」, やまだようこ他編『質的心理学ハンドブック』新曜社